

琉球大学学術リポジトリ

国頭村の森林と林業の歴史を語る

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農学部 公開日: 2011-04-20 キーワード (Ja): 林業史, 沖縄県国頭村, ヤンバル キーワード (En): History of Forestry, Kunigami Vil. in Okinawa Prefecture, Yambaru 作成者: 仲間, 勇栄, Nakama, Yuei メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19162

国頭村の森林と林業の歴史を語る

仲間 勇栄¹

¹琉球大学農学部亜熱帯地域農学科教授

Reminiscences on the Forestry Life in Kunigami Village, the Northern Part of Main Island of Okinawa

Yuei NAKAMA¹

¹Dept. of Sub-tropical Regional Agriculture, Faculty of Agric., Univ. of the Ryukyus

キーワード：林業史、沖縄県国頭村、ヤンバル

Key words: History of Forestry, Kunigami Vil. in Okinawa Prefecture, Yambaru

I はしがき

本資料は、国頭村出身の明治、大正、昭和生まれの方々が一堂に会し、自ら体験した山の生活を語ったのを記録したものである。座談会は平成17年10月14日に国頭村森林組合の会議室で行われた。

この座談会の内容は、戦前・戦後・復帰後にかけて、国頭村の人々が、どう山と関わってきたか、その歴史像の一端を林業史の面から明らかにしている。国頭の山の生活誌を語る古老たちが少なくなった今、実体験に基づく話という意味において、極めて資料的価値の高いものといえる。

その内容は、薪や材木の切り出し、炭焼き、藍づくり、山の利用の仕方など、多岐にわたっている。これらの歴史的事実が、今後、国頭村における森林の管理・利用のあり方を考える際の参考にでもなれば幸いである。

座談会に参加された方々は、以下のとおりである。

饒波正一郎（辺土名、大正9年2月29日生）、宮城勇（佐手、大正15年5月17日生）、宮城正男（奥、明治44年12月8日生）、玉城凱宜（奥間、昭和16年12月23日）、知花裕昇（辺戸名、昭和15年10月14日生）、与儀幸政（浜、昭和12年11月21日生）、宮城英二（与那、昭和11年10月15日生）、平敷善光（安波、昭和9年11月12日生）、浦崎家正（伊地、昭和9年2月10日生）、渡具知政昌（伊地、昭和5年8月3日生）、大嶺進一（進行役、浜、昭和24年4月2日生）。仲間勇栄（司会）。

II 本文内容

大嶺；皆様には大変お忙しい中を国頭村森林組合20周年記念誌の座談会に御招きしたところお集まり頂きありがとうございます。学校の50周年及び100周年とかの記念誌には、いろんな座談会がありますが、森林組合関係ではあまりみられません。特に国頭村では、昔から山と深いかわりがあります。そう言うことで何名かの方々を集めて、山との関わりについて座談会を開催しようと思っていました。そこで今日の

座談会では国頭村の林業体験について語り合うことにいたします。仲間先生の方からメモ書きが皆さんに配布されています。それにある程度添った形で進めていきたいと思っています。まず初めにこの20周年記念誌の委員長である饒波正一郎さんよりご挨拶をお願いします。

饒波；配布資料に書いてあるように、お互いの山がどのようにして今日に至っているのか、過去を勉強し現在を考え、将来子や孫に残すべき山の方向付けをする為に座談会をすることに大変わくわくしております。国頭村には沖縄県でたった一つの森林組合の木材加工場があって大変すばらしい成績を上げております。今日の新聞に粟国島のソテツ味噌の記事が載っていましたが、新聞に山のことが出ると非常にうれしく思います。仲間先生を中心にして実りある座談会ができることを大変期待しております。将来に向けての話し合いができれば幸いです。ごぞいます。仲間先生よろしくをお願いします。

仲間；何ヵ月前、大嶺組合長から20周年記念誌の座談会をやりたい旨の話がありました。大嶺組合長の話では、この際だから昔から国頭村の林業に関わってきた人々を集めて、お話を聞いて記録に残したいということでありました。私はそれは非常に大事なことだと思いました。というのは、これまでの国頭村の情報といえば、歴史資料が中心で、これらの記録資料を使って研究が進められてきたわけです。国頭村で昔から林業にたずさわってきた人達の生きた情報はなかなか残されていないというのが実情です。ぜひ山で体験された方達の生の声を記録して残してほしいというのが私の願いです。これから国頭村の山の生活体験談を記録することで、今後、20年、30年あるいは50年先に、後輩達がそれを読んで昔の国頭村の林業を理解して、そしてまた新たな沖縄の林業の将来あるべき姿を考える1つの重要な情報源になりうると思います。今日は私も諸先輩方のお話をお聞き勉強したいと思います。組合長さんからお話があったように、私のメモ書きしたのにとらわれないで、ざっくばらんにお話していただければ幸いです。記録されたものは後でわたしの方で整理して、皆さんに再度目を通していただき立派な記録誌にした

いと思っていますので、よろしくお願ひします。

大嶺；今日の出席者を簡単にご紹介しします。右手の席から元村長の饒波正一郎さん。元村長の宮城勇さん。奥部落の宮城正男さん。宮城さんは国頭村役場で長い間勤められ、奥部落の林業の生き字引です。満92歳になります。次は前組合長の玉城凱宜さん。次は知花裕昇さんで元村の収入役です。次は渡具知政昌さんで最初の林業組合長です。次は浦崎家正さん。国頭村における林業家で今は息子たちがやっています。次は当初からの理事で平識善光さん。次は宮城英二さん。息子たちが林業を継いで長い間やっています。次は元組合長の与儀幸政さん。昔から林業組合関係でやっていて、今は息子達が継いでいます。以上のメンバーです。よろしくお願ひします。

仲間；皆様方には、配布した資料にありますように、大きな見出しに沿ってお話を進めていきたいと思っています。第一部は山の管理のやり方です。山をどうやって管理して利用していたのかという事です。各部落でいろんなやり方があると思うのですが、そのような話から進めていきたいと思っています。

渡具地；この件については、各地域で相当差があると思います。僕等の系統は本部なんです。父が幼少のころに国頭に来たんです。父は明治27年生まれですが、国頭に来た目的は本部に財産がないもんだから、土地の払い下げ移民の格好で国頭に来たんです。国頭の山を開墾して藍を栽培していました。祖父が体が弱かった為に祖母はこの藍玉をもって与論島で商売していたみたいです。藍玉には木灰を使うもんで、カシノキ（オキナワウラジロガシ）の灰が使われていたと聞いています。当時はカシノキの抜き切りは厳しくなくて、どこでもカシノキは取れたんじゃないかと思う。明治のころ開拓移民には三系統があって、一つは山で藍栽培、二つは銅山の開発、三つは山奥で養蚕をしていました。藍栽培を目的に山に来たのは10世帯ぐらいといわれています。その時分まではおそらく今みたいに国有林、県有林、村有林に分かれていなかったんじゃないかな。柚山時代に入って来たんじゃないかなと思っています。金武町での僕らの同年の話ですが、なぜ国頭では国有林や県有林で入会権が設定されなかったかといわれました。そのことについてはよくわかりませんが、金武町あたりでは国有林や県有林がないからそういう発想になったと思います。

仲間；今のお話で確認しておきたいことがあります。開拓移民の場所はどこでしょうか。

渡具知；伊地集落です。

仲間；伊地集落のどこで藍玉を作っていたんですか。

渡具知；あのころ農家の次男や三男は土地がないもんだから、当時、県の政策で国頭の山に入って山の範囲を決め、藍を栽培していたようです。その場所はその後クスノキ造林などがしてあります。

仲間；そこは現在でいえば村有林内ですか。そこで藍壺をつくっていたとか。カシノキで木灰をつくったとか。

渡具知；村有林内で現在「エーチブ」いうのが残っています。現在その土地は個人に払い下げられて私有地になってい

ます。村有林の中にあります。

仲間；藍玉を作り始めたのはいつ頃の話ですか。

渡具知；明治23年頃です。

与儀；この山の管理についてですが、私は辺戸部落の入会権の問題で入会権の流れを調べたことがあります。国頭の20箇部落には字界というのがあります。20箇部落の山にはシジ嶺、谷間などを境界として各字が山をもっています。そして各字の山にはそれぞれ名前が付いています。ふえ又とか何々山とか。いろんなかたちの名前が沢山あります。その山を各集落で今年は何ヘクタール伐採すると言う形で行うわけです。その当時は石油やガスのない時代で家庭では薪を使っていました。そういうことで山は家庭用燃料薪の伐採の場所として位置づけられ、伐採された薪は中南部へ出荷される体制が整っていました。現金稼ぎの場所として国頭村では山依存しかなかった訳ですよ。当時は農産物の出荷体制が出来たところは桃原だけでしたね。ほかの地域は主に山稼ぎで現金を得ていたのです。山稼ぎを維持するために各集落の役員会と部落の承認を得て経営計画が立てられていました。だいたいの地域がそうです。戦前戦後から日本復帰までそういう形態で行われていました。部落の資金を捻出する場合にも部落の共有林を処分して資金をつくっていました。集落には共同店とか山係りがありました。伐採した薪は部落への口銭として一束何銭かを納め、その薪は共同店の前に積み重ねて置いて出荷しました。その当時は原木は肩で担ぐとか馬で引いて山から搬出する方法で行っていました。林道の草刈とか、また林班に入る時は人が搬出できるように部落全体で管理していました。芭蕉布とか、えいえー（藍）、染物などの適地は、部落が個人に貸し付けていました。我々が小さいころは木材はどこの林班で切るようにと決められていました。業者によっては払い下げをうけ、伐採搬出は地元の人を使って行っていました。そういう方法は終戦後から復帰まで行われていました。林業組合が設立されてからは、植林で補助事業を得るために組織化が行われました。林業組合は名護森林組合の外郭森林組合として何年か存続した後、森林組合として独立し組合自体で山の経営をやっています。山については村がどこを払い下げしなさいとは言わないで各部落で場所を決め入札して払い下げしていました。各部落から国頭村に申請し払い下げを行っていたのです。

仲間；払い下げ場所を特定して部落の総会で決定した後村に報告するのですか。

与儀；場所について村に報告して払い下げをお願いします。ずっと前まではそうではなかった。復帰以前までは部落独自で山の経営をしていたのです。

仲間；かなり部落の権限が強い感じですね。

与儀；今でも強いです。だから山の払い下げをするにもですね、部落の承認を得ないと難しいのです。村の造林や森林総合整備事業等は以前までは部落が主体に行っていました。

仲間；部落の役員会で決めていたのですか。

与儀；各集落には山係りというのが置かれていました。その山係りがこの林相は伐期に入っているから処分しますという形で計画的にやっていました。切り方も全体的に抜き切り

です。乱伐のようなものはありません。あの当時までは抜き切りなんですよ。植林はしませんから、いい材料は適当に切っていました。萌芽林として残ったものが今どんどん繁殖しています。日本復帰してから植林事業というのが入ってきました。その前まで琉球政府時代には焼畑造林がありました。実際には松の造林でやっていたのですが、失敗して効果がなかったのです。それ以後は樹種を選定し適地適木の考えで、伐採後に植林をする時代に入っていました。林業組合では皆伐したら植林するようになりました。

仲間；そういう形がはっきりしてくるのが復帰以降の補助事業とか森林組合が組織化されてからでしょうか。

与儀；森林組合が組織化されてからですね。復帰前までは各字に造林業者がいて村が直営で集めて造林をさせる地域もありました。

仲間；どういう形態の造林業者ですか。

与儀；業者が人夫を集めて伐採する形態です。

宮城（勇）；今と関連しますがいいですか。今与儀さんが言ったように、伐採適齢期になると村が立会って部落と伐採木を決めそこから伐採をはじめます。それは地元の住民が入会権をもっているためです。それで村としては部落から立木税を何割か徴収していました。わかりやすく言えば土地の使用料です。部落が9取って村は1取るというように。造林の話がありましたが、伐採をしたら造林をするのは当たり前だと考えられていました。各部落で植林や林道の掃除を半強制的にやっていました。部落民は当然のこととして受け止めていました。山の管理は部落で決めていました。村有林内に個人で造林をするときには、樹種をきめて許可を与えていました。

仲間；許可を与えると言うのは部落の同意を得なければならぬのですよね。

宮城（勇）；村有であるけれども部落の入会があるためです。

与儀；奥部落あたりでは青年団組織でスギ造林しています。直営でそういう形で団体がやっていました。

饒波；その私有林のとり前は植えた人は8、部落は1、村は1となっていました。公有林から出る材のときには部落が7、村が3の分収でした。

与儀；これは復帰前の分収条例にもとづいたものです。材の出荷量では一束いくらというように口銭の手数が取られていました。

饒波；たとえば公有林辺土名地内の物を仲間先生に売った場合に、この売った値段の7は部落にやりますよ、3は村ですよという分収です。これは1926年辺土名でクスノキを売った時の割合ですね。クスノキの立木を競売してその時に部落が7ですよ村が3ですよという分収制度です。

仲間；今の話は村有林ですよ。立ち木を競売したときの分収の覚書は7が部落3が村ということですね。

饒波；明治のころ国有林の地元への有償払い下げで、30ヵ年で国に払い下げ代金を納めるのがありましたよね。昭和12年頃まで支払した訳です。国に収める15ヵ年償還から30ヵ年になりましたよね。そのときに山代払う為に部落から税金みたいなものを取ったわけです。ほとんどの山代は昭和12年ご

ろまで終わっています。村は金はないから山の税金から出して終わったのが昭和12年頃です。それまで山代払っていました。

仲間；今おっしゃっていることはわかります。山特別処分のあと、国有林を地元の町村に有償で払い下げを行います。その払い下げ代金が払えなくなって、結局は30ヵ年かけて完了するわけですね。

饒波；国有林の払い下げの後、乱伐になって村は心配した訳です。村として大変になるということで山づくりのために大正3年村民大会が行われました。国場幸太郎さんなどはクレ板を山で四角に削って火をたいて乾かして出来るだけたくさん持てるようにとやっていました。そのときは月給取りなんかをバカにして、山アッチャーの天下になっていました。そのため山は荒廃し、そこで村民大会をやったのです。

仲間；そのときに切るところを決めていたとか。

饒波；村がここは何拾年間切つていいとかですね。さっき話があったように部落で切つたのは当然だが、皆伐が始まったのは木炭生産が行われるようになってからです。それまでは角材の良いものだけ選んで抜き切りしてしていました。木炭を製造するようになってから皆伐の方が山は良く育つということを経験でわかった訳です。以前の抜き切りから皆伐に変わったのは木炭生産がきっかけです。

浦崎；正男さん、戦前、奥部落はポンポン船を持っていたよね。部落が林業とどうかわわっていたか話してください。

大嶺；これまで部落と山の管理の中で入会利用の話がありました。伐採した材をどう出荷していったか、またその地域でどのように利用していたか、いろいろあります。奥部落の昌男さん、伐採された原木がどう加工され、どこにどのような形で運ばれていったか、そのへんのことをお話してください。

宮城（正）；私は奥部落の出身です。戦前の奥部落の人口は辺土名に次ぐものでした。一時は人口が1,000名もいました。ほとんど山依存の生活でしたね。そのために山を守らなくてはならなかった。山入り日、集団で1日何回とか、年間を通して山の利用制限を設けてやっていました。山入りが自由でしたら山が荒れてしまいます。限りのある山ですから山入り日を設けて何日の利用とやらないといけないわけです。人口も多いですから。週に2回2日間の山入り、農業日は週に3日、農休日は月の1日と15日というふうに決めていました。もし山入り日以外に山入りした場合は札ですね。小学生時代に方言札があったように奥では盗伐には山札があった。1日1銭の過料を課して山の維持をやっていました。山札は次の盗伐者を見つけて渡しました。1~2ヵ年の間、次ぎの盗伐者が見つからない場合はどうするかというと、山札をとって1ヵ月間次の盗伐者が見つからない場合は、過料を免除する仕組みになっていました。そういう規則を作ってやっていた。山入り日でも自由自在に大の男が2回も3回も運ぶということはないで、1人1日ひと担ぎとして決めていました。大の男も小の男もそういう取り決めをしていたから山の保護ができたわけです。明治39年に奥の共同店が創立します。当時、林産物の輸送には帆船が使われていました。明治時代には帆船は個人所有のものが3艘ありました。林産物はこれに頼ん

でバーターで取引しました。林産物を那覇で売りさばき、帰りに酒、米類、メリケン粉、雑貨類などを仕入れてきました。那覇には会計係りが1人駐在していて林産物のさばきや日用雑貨の仕入れに当たっていたんです。

饒波；山の利用で毎日の制限と回数の制限があったのか。

宮城（正）；大嶺組合長、資料を準備していたんだが忘れてしまいました。

大嶺；後ほど伺いますので。週に2回山入り日と決めていたようですけども、かなりきついですね。山入り日を管理する人を置いていたのですか。それとも皆で管理していたのですか。

宮城（正）；山係りがいて、取り締まりを行っていました。山係りには手当てがついていました。私たちが子供の頃、厳しい山係りがいて厳しく取り締まりをしていました。皆からおそれられるぐらいの厳しい人だった。

大嶺；手当ては区から出た訳ですか。当時はどれぐらいの手当てだったのですか。

宮城（正）；後でしらべて報告します。

大嶺；与儀さんの話の中にも出てきましたが、ほかのところでもみんな山係りを置いていたのですか。特別に村から置くようにいわれていたのですか。

与儀；各部落で山ピサ（山筆者一王朝時代の山係り）及び山係を置いて、各部落の隅々まで山の境界線を設置していました。境界を越えて他部落の山を切ると喧嘩ですよ。

大嶺；大変なことだったんですね。

宮城（正）；島袋永久さんは当時部落から山係りとして任命されていました。戦後は部落の役員から任命され名称も土木係として現在はやっています。今は役員がやっています。

仲間；山係は具体的にどんな見回りをするのですか。

宮城（勇）；毎日見回りする訳ではない。何日かごとに巡視するだけです。

仲間；決まってないですね。

宮城（勇）；何日ごとに廻るということで、部落との約束があります。

仲間；山係りが山の伐期の判断をするのでしょうか。また盗伐の話がされていたんですが、山係りが盗伐の取り締まりをするのですか。山札は山係りが管理するのですか。

宮城（正）；山係りは盗伐した木の取り締まりをやっていた。時間を見計らいながら盗伐をしていました。山札をもっている方がいる間は、その人をみながらみんな盗伐しないわけです。

大嶺；これは何年頃だったんですか。何年～何年までの話ですか。

宮城（正）；戦後です。

仲間；もっと山札の話聞かせて下さい。例えば私が盗伐して山札取りますよね。そして1ヵ月間過ぎると免除になるということですか。だけどその間に誰かを見つけて札を渡さないといけませんよね。

宮城（昌）；盗伐する人を見つけきれなければ、1日1銭の過料を払わなければならなかったです。

仲間；1日1銭といってもあまりピントこないですが。ど

れくらいですか。

宮城（正）；100円ぐらいという記録がありますが、きびしかったのでしょうか。1日5銭のときもありましたよ。それでは負担が重いと言うことで1日1銭になったわけですよ。1銭で豆腐が1丁買えました。

仲間；豆腐が1丁買えた訳ですか。

宮城（正）；先ほども申し上げましたが、村や部落の山は限りがありますので、施業案によって1ヵ年に何町歩と決めてから伐採した訳ですね。戦後、戦災復興の為に新たな計画の下に用材林、皆伐林の区域を設けていました。皆伐区域は自由に山入りして切れる訳ですが、用材林区は復興用材のための設定区に指定されて自由に切ることはできませんでした。戦前は山入りの公休日として1日15日が制定されていましたが、戦後は時代も変わり、パイン、ミカン、スモモとかは2日から1日に変更し、現在では月の第2日曜日を山入りの公休日として決めました。これがずっと今日まで続いています。

仲間；公休日というのは、山に入らない日のことですか。

宮城（正）；部落全体の仕事をしないという事です。これは徹底していて、今では休暇日はグランドゴルフやゲートゴルフなどをやっています。

仲間；山札はどういうものだったんですか。

宮城（正）；木製で山札と書いてありました。

大嶺；ほかに山札があったところはないですか。

仲間；奥間の玉城さん、どうですか。

玉城；戦前のことはあまりわかりませんが、記録によると私の父の祖父の方は玉城太永と言って山を経営して、山原船で林産物を奄美大島、那覇へ運び貿易をしていました。国頭村から何を持っていったかというクスノキ、琉球藍、木炭、砂糖、建築資材、薪炭など、こういった物を持っていったようです。帰りに生活物資をもってきたようです。それで村内の需要をまかなっていました。与那覇岳あたりまでクスノキを植林して樟脳をとっていました。私有林でもクスノキを植えていました。樟脳の製造所があって祖父の兄を集配人、また林産物の生産管理の責任者にして、奥間山から伊地山一帯にかけて山で生産し販売していました。そこで琉球藍とクスノキを主にやっていたという話を聞きました。うちのおばさんの記録に書いてあります。おばさんは山から学校に通っていたようです。饒波正一郎さんと同級生です。昌男さんがいうように、私有林の経営のやり方で公有林もうまくやっていたようです。村が測量して払い下げていました。用材林と皆伐林の話がありましたが、うちの父は村から払い下げてもらって皆伐して木炭を焼いていました。皆伐といっても大きい空洞木などは切れないので残してありました。ノコで切れない、木炭にもできない、そういう木があっちこちにあったわけです。皆伐していますが、200年～300年の木があっちこちに残っているわけです。皆伐については、大正3年宮城村長が村会議員及び区長を集めて、国頭村の最初の林野・村有林に関する指示を出したものがあります。記録によれば大正3年に皆伐区域を1年目2年目と段階的にやっていって、その場所から造林をやるというものです。このときに皆伐区と用材区とをわけてはじめてやったのではないのでしょうか。

仲間；記録というのはどういうものですか。

玉城；日記に書かれたものです。

大嶺；知花さん今の件で何かないですか。

知花；第2部でお話します。

大嶺；浦崎さん今の項目の中で何かありませんか。

浦崎；私は戦前のことはわかりません。戦後沖縄がB円からドルに切り替えた年が1959年、私が共同店主任になったのは60年です。その当時、饒波正一郎さんは村議員、宮城勇さんは経済課長をしていた訳ですよ。B円時代からドルに切り替える場合に、薪1つを2セントでかえなさいときたわけ。これを売店は2銭2厘割掛けで売るわけです。その時代はサポート材、竹、木炭など、すべて山原材を利用していました。私は2ヵ年間共同店にいてだいぶ勉強になりました。渡具知さんは29歳の青二才の区長で、私は26歳の売店主任でした。山依存の生活でした。伊地区の人口は現在230名、あの当時は450名もいました。国頭村の人口が9,000名でははずです。当時私が製材をしていたときに、恩師の饒波正一郎さんが僕の所に来て、丸太を買ってくれないかといわれました。この原木からは3寸の角材が出るか、3寸5分の角材が出る木か、4寸の角材ができる木か、見通しを立てて買わなければ成らない訳です。そういう立場で私も饒波正一郎さんのものを買っていました。当時は薪がものすごく出ました。2ヵ年間部落の共同店主をしてから部落会計に移りました。あれから横切りのヤンマーで薪を切っていました。薪はタバコ乾燥場にもいくらでも出ていきました。ノコで切る時代から製材機械で切る時代になりました。20ドルで原木を買ってアメリカのGMCで割ると、2倍の40ドルになり売れました。あの当時は林業が国頭村では盛んで、横断道路は出来るし、一周線も出来ているし、すごく活気づいた時代でありました。木炭はカマス一杯いくらかと言うと、冬場になると5ドルの買い手が那覇から来ていました。1日の日当が2ドルぐらいの時代で、木炭が5ドルもすると言うことで、羽地あたりから来て国頭に移り住んだ人もいたわけですよ。原木を担いでいる時代ではない、林道の時代でないといけない、ということで、山道をアメリカ製のブルで開けて、山の中で生産者は売り買いするようになって、各部落とも景気がよくなっていましたよ。村有林は払い下げでした。利用するときは部落に年間いくらかという口銭を納めました。皆伐ではなく抜き切りで金になる木を切った訳ですよ。

仲間；確認したいのですが、薪をこれぐらいで1本ですか。

浦崎；木を割って束にして作る訳です。大体釜の飯が1束で作れましたからね。1束2セントで生産者から買います。これをサバチャーといいます。

与儀；国頭には20箇集落あります。当時、6トンの林産物専用トラックが28台もありました。戦後、それだけ林産物を都市地区に運搬する生産的な活動があった訳です。各集落とも木炭や薪などの林産物をトラックで中南部地区に運び、帰りには生活物資を運んでいました。山に依存した非常に活気ある時代でした。復帰後、饒波正一郎さんが村長時代のときに、村役場建設の資金の調達と農業振興のために山を払い下げました。部落から要請があったので農業振興のために山

の払い下げをしました。山の生活はきついものですから、パインナップル産業やキビ産業などの農業に生活の中心が移っていきました。さらに多くの人々が都市地区に流れていきました。それから名護の北部森林組合の下で国頭村に組合組織が出来て、加工事業を主体として植林事業などが村と一体となって行われていました。その後、国頭村森林組合が独立し森林組合を中心とした山の払い下げと山の委託管理へと変わっていきわけです。

宮城（勇）；所谷先生が奥部落で木炭窯の指導にあたっていましたね。昌男さん、説明できませんか。

大嶺；第2部でお願いします。平敷さん、安波の部落で何かありますか。

平識；特に安田、安波、楚州ですね。戦前から戦後の1957年までは道路がなく、山原船を利用した海上輸送でした。現金収入源は山でした。林産物は共同店が全部買い上げていました。船舶は5隻ぐらいいたと思います。与那城村、今の与那城町平安座の業者の山原船が5艘ありました。与那原の馬天あたりに林産物を運搬していました。部落民は共同店で「えんばい」（掛売り）で生活雑貨を手に入れていました。林産物を売りさばいた金で売店の掛けを払うという方法ですね。1957年に2号線の道路が出来きました。1958年に東の方から安波まで米軍の演習道路が出来きました。道ができてから林産物は売店所有のトラック（1台）で木材を運搬していました。

仲間；安波部落は村有林をどういう形で利用したいのでしょうか。

平識；安波部落の村有林は村内でも多いほうです。村役場の建設資金の調達で払い下げたのが100町歩あまりで、今では合計400町歩の村有林がありますからね。当時は約700名の人口がおりまして、毎日山の生活ですから村有林だけでは間に合いませんよ。国有林の盗伐ですね。戦前から国有林を盗伐してました。安波には戦前から戦後まで営林署の担当区がありました。戦前は大和から担当者がきて盗伐した人からナタとかノコを取り上げていました。山だけでは生活が出来ないということで南洋に相当な人々が移民していきました。罰金を納める力がないために南洋に逃げて行ったようです。戦後は北部営林署の管轄でしたが戦前みたいには厳しくなかった。公有林だけでは限界があり北部営林署の国有林にお願いして、毎年面積を決めて払い下げをしていました。それでも払い下げた周辺から盗伐してました。

仲間；村有林はどうだったんですか。ここも盗伐ですか。

平識；村有林は自由ですよ。自分の財産山みたいなもんですから。抜き切りです。

仲間；奥部落とちがいますね。

平識；奥とはちがいますよ。奥は厳しいです。安波は自由です。公有林では足りないのでも国有林を盗伐してました。国有林は国頭で一番大きいですよ。

大嶺；宮城英二さん、与那部落でのことをお願いします。

宮城（英）；私は与那部落出身で林業は3代目です。年齢的に昔のことはよくわかりません。まず渡具地政昌さんの話から始まって、奥の大先輩の山札の話、元村長饒波正一郎さ

んの話などを聞いてびっくりしています。僕等が林業していた時代には横断線が出来ていました。公有林野の伐採では部落の協議がありました。僕等の時代にも県有林や村有林などの払い下げがあったんですが、払い下げる時点ですでに切っただけで無いわけです。与那は99%林業依存の生活でした。部落では業者が3~4名いて業者と林業で生活を営んでいる皆さん(山アッチャー)とが相互関係で林業が営まれていました。例えばAさんが製材所を持っている。与那では3つの業者がありました。3つの業者に山アッチャーがついていました。他の部落の共同店は林産物を買占めて、那覇などの都市地区にもって行って販売し、向こうから生活物資を買ってくるという話でしたが、与那は製材業者との関係でやっていました。与那部落では他部落の山の伐採で喧嘩が絶えなかった。隣部落の盗伐を取り締まるために3~4名で巡視していました。特に与那は謝敷と横断線の関係でよく巡視していました。謝敷は小さいし人数も少なかった。与那は何倍ぐらいいる訳ですから、あれだけの人数で与那の人々を取り締まるとなると、向こうは山歩く(利用)ひまはないくらいに大変だったと思います。昔は1本切ってきて生活できたんですけど、横断線が出来て1人で何十本も切るようになりました。そうすると山というのはまたたくまに無くなる訳ですね。しかし盗伐しないでは飯食って生きていけないわけです。隣部落の山係りが通るのをみてから相手の山に侵入し盗伐をしていました。特に横断線(道路)が開通してから盗伐が増え、与那の人は安田、安波、伊地、辺土名などの人から非難されていました。昔は山で木を斧で削って乾かしてから担いできました。横断線ができて山の伐採が変わりました。昔は1本の木を斧で削って担いできて、それで生活できよったんですが、横断線ができてからは1人で何十本も伐採することができるようになりました。当時お金のことを木の葉に例え、横断線の時代に出た千円札をちゅ葉、一万円札をまぎ葉とたとえていました。お金を木の葉にたとえていたんですね。

仲間；国有林の場合はどうでしたか。

宮城(英)；国有林も盗伐ですよ。昔は山を払い下げして、自分で重機を入れて道を作っていました。今では木が生えて昔の道は見えなくなりました。昔米軍のベーカーというのがあって、どんな坂道や川でも木を積んで登りよった。

仲間；与那部落では村有林などを奥部落みたいに厳しく取り締りしていたのですか。

宮城(英)；戦後のことですが、僕らが知っているかぎり厳しい取り締まりはありませんでした。

仲間；戦前もそうだったんですか。

宮城(英)；戦前はあまり知らないですね。

大嶺；伐採制限区域は部落にありましたですか。例えば水源地の周辺とか。

宮城(英)；私は造林を個人で与那で一番初めにやりました。荒又橋から分水嶺までのところで私は始めたんですね。うちの長男が37歳になるので37年間になりますね。森林組合ができない前に、私は直接村と分収で造林をやりました。一番初めの松造林は伐倒して焼き払い残骸を片付けて、松の種子を蒔きました。

饒波；当時は広葉樹はチップにダメという事で松造林を県は進めたわけです。

宮城(勇)；与那の話ですが、なぜ1本担いできて生活できよったのに、横断線ができて車が入って10本も20本も出したけれども生活は同じだったかということです。与那には3業者がおって競争している訳です。製材所を持っているもんですから、材を出さなければどうにもならない。与那の部落有地だけでは足りない。そこで隣の謝敷山、佐手山、伊地山、安田山、安波山、それから国有林、借地県有林などまで伐採した訳です。私は当時山係りでしたから、特に村長からいいつけられて、横断線周辺、与那を1ヵ月に20日は見回りしていました。面白いですよ。僕らが見回りしていたら皆は林道に出てきて遊んでいました。監視人があっちこっちに立っていたんです。そして山係りが来たと連絡するんですよ。

宮城(英)；儲かるときには儲かりましたよ。ところが、いつ山係りが来るかわからないわけでしょう。仕事がおぼつかないですよ。山係りは今日来るのかどうか、これだけが頭にあるわけです。たとえば山の中に入ったとしても山係りは見えません。結局は山では儲かったようですが、1ヵ月に実際に仕事をしたのはなんぼかよく分かりませんでした。

渡具地；部落の水源地で水源涵養林と言うのはありませんでした。伊地は簡易水道は早かったです。1958年か59年頃だったと思います。鉄パイプを通して3回ぐらい取り替えています。山に雨が降ったら赤水が入ってくるもんだから断水していたようです。

大嶺；水源涵養林はないけれども、たとえば簡易水道ができたあとに各部落で水源地域での伐採規制を掛けていた部落があるのかどうか。

宮城(英)；与那の場合は琉球大学が管理している演習林以外は、区域なしに盗伐していました。

大嶺；以前聞いたことですが、辺野喜の元の水源地の上流では、木を伐採すると水が濁ってしまうということで、森林を保護していたとの話があります。他の部落はどうだったのか。

饒波；部落で自発的に作っているところもあります。

大嶺；部落の内規もしくは申し合わせみたいなもので、村から強制とかではなくて部落での決定なんですか。

宮城(勇)；簡易水道時代に各部落でここからここまでは保護しましょうと部落で決めていました。

平識；饒波正一郎先輩、さきほどの昭和27年頃の立ち木の7対3の分収割合は村の条例ですか。

饒波；だと思えます。僕が6つの時の1926年だからね。詳しく調べてはないんだが、そうだと思います。辺土名がそうであれば安波も7:3だと思うわけね。戦後、一番の問題で地番賃借料は6:4で部落に6という案をもっていった経緯があります。

饒波；公有林で私が記憶に残っているのは、特に大正時代は若い男女が夜遊びしちやいかんということで取り締まりがあって、隠れて浜辺で遊んでいたら、会長に見つかって罰せられたですよ。ところが山の手入れになると自由に話し合いが出来たので、彼女と話が出来る山なんか楽しくて、風邪を

引いた者でもその日になったら山の手入れに行きました。だから山は非常に若者にとって楽しい手入れ日で、山さんあげがとうと若者は言ったと思います。

渡具地；饒波さん、戦前は辺土名の水源地はどこにあったのか。

浦崎；戦前ぬやうんじゅな一島ぬ辺土名の水道まーからひちょういびーいていーマテイナ川ぬいちゃかいからやびーちい。

饒波；よんかいから。

浦崎；だからそのような所は今でも切ってはいけないとか、そのようなものがあつたのではないのでしょうか。学校山もまかっとうとつ。

饒波；お互い暮らして山を乱伐すると川を濁すから自然に切らなかつたと思う。

与儀；山払い下げする段階で知花徳三さんのみかん園の内側は木がなかつたですよ。今は木が茂ってものすごいですよ。こちらは払い下げした当時から動かしていないですよ。

饒波；公有林の中でも県有林は大事にして伐採しなかつた。あの当時切るのが当たり前でしたが、他の区民は県有林を大事にした。どうしてそうなつたか理由は聞いていない。

大嶺；強い締め付けがあつたということでは。

饒波；戦前は上方では巡査なんかは怖くない、怖いのは山びさ（山筆者）といわれていた。木を盗まないと食えないし生きていけなかつたからだと思います。

玉城；奥間から浜にかけての山は70%が皆伐、与那覇岳までは80%の皆伐でススキ野原になっていました。それでもヤンバルクイナは生き残っています。

仲間；浦崎さんがさっきおっしゃつたことを詳しく説明していただけますか。

浦崎；薪を生産者から2セントで買い取りします。1959年にB円からドルに切り替わりました。2セントで買い取りした場合はですよ、2セント2厘で売ります。仮に言えば与儀さんが業者であれば、与儀さんに売ると、那覇に持って行って2セント5厘で売ります。何厘というのがドル時代だから価値がある訳ですよ。6トン車に2,000束ぐらい積んでその上に木炭を積んでいきます。業者がおりまして国頭から那覇へは30台ぐらいの車が中南部へ出て行くわけですよ。糸満や与那原とかのマチャグワーに業者がいて、向こうに降ろして帰りは日用雑貨を仕入れて来た訳ですよ。薪の中には質の良い物がありました。赤サバチャー（シャリンバイ）と言って、そういうのは価値がある訳ですよ。イーク（モッコク）とかの薪はちょっと大きくしてこれは5セント、タバコ乾燥用の薪はもっと大きくして7セントと言う事で、いろんな薪を作っていました。薪を括るワナは必ず竹で作るよとの事でありました。燃えるように。

大嶺；全部盗伐していたんですね。

宮城（勇）；戦後の何も無い時代には、特に国頭の場合は、山の上の方は段々畑にしてイモ作っていました。辺野喜や佐手の60林班、61林班には平坦地が多く、また部落からも近かつたので、無断でアキケーバタ（明替畑）にしてイモを植えて自由に使っていました。その後、復帰してからそのアキケー

バタをやっていた人に貸し付けることになって、個人で申請をして貸し付けしたんです。その後はサトウキビやパインなどの換金作物に植え替えて面積を広げた訳です。それから辺野喜あたりでは果樹のミカンが栽培されていましたね。そのようにして換金作物が増えてきたということがある訳ですよ。そして今では辺野喜あたりでは借地した人が年老いて仕事ができないと言って返地したのがだいぶあります。佐手では18名で27.02ha 借りていました。借地した人は、今年の5月で1人しか残っていませんですね。あとは全部返して、その土地に県の方が造林しています。県有林には大変お世話になつたということです。

平識；これは黙認耕作地みたいなものですね。

宮城（勇）；戦後はそうでした。ところが復帰してからは県に借地料を払うようになりました。

大嶺；今の借地県有の話は安波にもありますか。

平敷；県有地はありません。国有林を借地している人がいます。借地人は3名で面積は2町歩ぐらいです。

大嶺；これで午前の部を終わり休憩に入りたいと思います。

大嶺；これから午後の部を始めたいと思います。お昼ですすぐですけども、屈託のないご意見を出してもらって腹の運動をしたいと思います。よろしくお願ひします。それでは2部に移りたいと思います。資料の2部～4部と続きますが、最後の段階でまとめていろんな話ができればと思います。2部は造林事業、伐採、復興材の生産、薪の生産、木炭の生産、竹材の生産、藍の生産、などの話になっています。また共同店と林業の関わりもありますが、これらをまとめてお話していただければと思います。宮城正男さん、何か木炭の話で所谷先生の話につないで、また共同店と林業のあり方についてもお話いただければと思います。

宮城（正）；明治の末頃までは製炭は旧式でやっていたんですが、記録によると大正5、6年ごろ四国からトコロダニ、シマムラ、ツルの3名が製炭技術の指導を奥部落でやったわけですね。3名は姓だけで名前はわからないようです。それで炭の質が今までのものより向上して、また製炭量もはるかに増えて量産できるようになって、非常に助かつたといつて皆な喜んでいた訳です。これが俗にヤマンチュの言う大正式窯です。トコロダニという人の息子が現在那覇に住んでいます。トコロダニトシオといつて年は73歳ぐらいですか。トコロダニのお父さんは息子を連れて奥までこられたわけですね。奥から4キロぐらいのダナというところに、ちょっとしたふっかけ屋グワー作って住んでいましたが、年を取つてからは息子のところに住んで亡くなられたと聞いております。

仲間；これは何か指導の為に沖縄県が招待したんでしょうかね。

宮城（正）；そういことはないようです。あれはトコロダニさんが奥のことをいろいろ大阪方面で聞いて、自ら他の人も引き連れてこられたと聞いています。

大嶺；どこから来られたんですか。この方々はどこの出身ですか。

宮城（正）；四国の人で、所谷、島村、津留、という名字です。

饒波；この人（所谷）に僕は会ったことがあります。海岸で山手の方に住んでいたと思う。昭和14年に木炭だけじゃなくクスノキの樟脳も造っていました。長男は養護学校で校長していました。

宮城（正）；所谷の息子は小学校は楚州で高等科は奥だったと思います。そのあと師範学校に合格し卒業してから長いこと学校の先生をしていました。今も健在だと思います。お父さんはもう亡くなっています。

玉城；この点についてですね、先生の方で詳しく調べてもらいませんか。製炭の専門家ですからね。県からの委託で村経由できたのか、あるいは奥の方が招待したのか、この辺の話がはっきりしないことには。ただ県の指導体制は入っていた訳ですよ。宮城永輝村長を通して送ってきたのか、その辺を解明する必要があると思いますね。県の指導は入っていますから。

仲間；あるいは別の何かのきっかけで来られたのか、樟脳を造るためか、あるいは何か商売できたのか。何かがあったんでしょうね。

饒波；それに関する資料はあるから、後で調べてみましょう。

玉城；宮城永輝村長が大正3年頃に、皆伐の仕方について議員を集めてやっていますから。だいたい同じ年代ですよ。皆伐で何するかというと木炭しかないですよ。

仲間；理屈としては合うような気がしますね。

饒波；県の要請でしょうね。当時クスノキ造林を積極的に進めているから指導員としてお招きしているかも知れませんね。

仲間；拡大造林で伐採木を木炭にするんで、有効利用する為の指導があったのかな。

饒波；大正窯ですよ。昭和になって昭和窯が出てきたんですよ。しかしこれはあんまり大正窯には勝てなくてやめちゃった。昭和窯には炊く所が左側にあった。昭和窯は名前は新しいんだが大正窯にとって変ったんですね。

仲間；大正窯というのは今あるんですか。

饒波；今あるのが大正窯です。

玉城；空気の入れ方が窯によってぜんぜん違うんですよ。羽地の方で使っているものとも違う。大正窯使っている人もいれば、コウシュウ窯を使っている人もいて、いろいろあるんです。うちは戦時中から親父がコウシュウ窯を使っています。羽地のものとはぜんぜん違います。

戦前奥に指導体制で窯が入っていますから、それ以前はどういった窯を使っていたか調べなければなりません。山で穴掘って1メートル四方に木を入れて伏せ焼きだったのか、もう一つはですね、鍛冶屋と一緒に沖繩にきていると思うんですよ。アガリカンジャーがありますね。1400年ごろ金丸（後の尚円王）をかまくったアガリカンジャーは有名なんです。

宮城（正）；四国から来た三氏の講習を受けてからかなり製炭が良くなりました。以前は方言でウシディー1メートルに1メートルの穴を掘ってから木をくべ、適当な時期に燃えきった7部8部ぐらいのところ芭蕉の葉っぱをかぶせ、その上に土をかぶせる、という方式ですよ。方言ではウシディー窯（うすい窯）と言います。

与儀；戦前から戦後にかけて各集落ごとに、薪炭、木材、復興材など、あらゆる物資を供給しておりました。森林組合が昭和53年にスタートするまで各業者が原木を販売していた。復帰後、山の保全と活用についての行政的な施策が打ち出された。パルプ材は運天港から原木で本土の製紙工場に出荷していましたが、森林組合が設立されてチップ工場が出来てから国頭村内の原木業者はすべて一つの流通体制に組み込まれ、一貫生産という形に変わりつつあります。奥なんかは部落で木炭生産組合で生産していたが、また比地や奥間でも木炭が生産されていたが、個人販売だったために家庭用燃料として売れなくなって自然に衰退してきたのです。森林組合は現在ではチップ、原木加工、集成材などを生産していますが、今までばらばらにやっていた生産事業を一つに統一し出荷体制も整えました。時代の流れで、森林組合は林業と森林造成を行い、山の保全管理を充実する為に組織として生まれてきたわけですよ。

大嶺；これまで木炭の話をしてきたが、特に終戦直後の復興材についてお伺いしたいと思います。復興材とはどんな物だったんですか、どういう形に作って、どこに売られていったのか、何で運ばれたのか、そこらあたりのことを話していただきたいと思います。

与儀；饒波正一郎さんが良くご存知だと思います。製材所を持っていたからわかると思いますが、80%シイジャー（イタジイ）であったですね。供給するのは与那原とか石川とか那覇あたりの各木材屋ですね。そこで緊急復興材として利用する需要が高かった訳ですよ。

その後、スギ材がガリオア資金で内地から来る訳です。山原材は防虫防蟻もされていないもので一時的な復興材として利用された。後はスギ材とか外材とかに押されて需要が減っていきわけです。終戦直後は米軍統治下で内地から輸入ができないので、戦災復興のための一時的な資材として山原材の需要は高かった。

大嶺；たとえば量的なものはどうでしたか。最初のころは製材があつて角材にしてというのではないと思うのですが、丸太でどの時期までであったのか、たとえば昭和何年頃まで丸太で出て行って、その後いつ国頭で製材が始まったのか。一時期製材所が18か19工場あったといわれますけれども、どの時点から製材されてどういう物が主にでていったのか、どこに出て行ったのか、全部個々人で売ったのか、共同売店を通じて売ったのか、中南部の業者に売られていったのか、そこら辺りの話がありましたらどうぞ。

饒波；戦後すぐに製材はあつた。8月15日が終戦になってアメリカが10月に農協にお前ら製材をもっとやれと言いつけてきました。製材で早いのは大宜味村の饒波の大宜味農協で丸太で出す期間はなかった。10月15日だったかな、辺土名はオキツの向こうに農協の製材所ができたんですよ。必要な物は製材所に持って行って製材しなさいということでありました。戦前は1日2人で鋸で引いて2坪。戦後は丸鋸で40坪。帯鋸になって60坪ですね。柱は柱で角に製材やるが、こっちは昔から山していて技術もあるので、丸太を角材にして出す訳ですよ。山で斧で削って。今考えると神業みたいですね。

本当に四角にこうして10尺8尺角にして斧で削って出した。しばらくすると製材ができたんで、丸太で出して製材所で製材をした。最初のころは斧で削っていたものです。

平識；安波は戦前から戦後にかけて山依存の生活でしたですね。戦後の昭和26年頃までは原木を斧で削って角材をとっていました。昭和26年頃から部落に製材所が出来て、共同売店が原木を買い取って製材していました。道路ができた後は丸太を牛や馬で引いてきて製材をしました。イジュの方が値段は2割ぐらい高かったです。

大嶺；最初の復興材で本当に角材はあったのですか。ほとんど丸太でなかったのか。

饒波；最初は山で斧で削って四角にしていました。

大嶺；そこまでゆとりがあって出した訳ですか。注文が多くて復興材として山で角材にして出すまでの時間的なゆとりがあったのか。たとえば国頭あたりで10万³mから15万³m切られた話がありますよね。

宮城（勇）；戦前は山で木を切って斧で削っていました。ということは1日に1回山に行き担いでくる程度ですね。

与儀；木を斧で削るのは戦後もあった。いい材はそうしていました。丸太だったら重いし削れば軽くなります。

平識；墨で線を引いて斧で削りよかったです。

大嶺；復興材として出た材も多くは角材で出たという考えでいい訳ですね。

浦崎；戦前の角材はですよ、斧で削って、4寸角を取るんだったら4寸5分木を削る訳ですよ。大工さんが縄を打って手斧で大工さん二人で5本ぐらい削ったらいい方ですよ。私も戦後斧を持って削ったことがあります。この斧で削った角材で戦前の家は皆作られた訳です。戦後の復興材はシジャー（イタジイ）であろうがイジュであろうが軽い木であろうが、山から出して斧で削っていました。沖縄は焼け野原でしたから。は一やまくー（何でもいい）ということで3寸角の材を中南部に運び出していました。那覇からも業者が買いに来ていました。国頭村には各部落に仲買人が1人2人ボスがいたわけです。山の生産者から買い付けて何%かの利益を取って中南部の人に売る訳です。向こうにもって行って、いい木の場合は昔みたいに大工さんが手斧で削ってやる訳ですよ。悪い木は生で建てるもんですから、虫に食われてなくなる訳ですよ。それはよくないということで、スギ材が入ってきたわけですよ。スギ材には勝てないということですかね。家屋建築でイジュの木を中に入れる、外にはシジャーのみで入れた場合はですよ、100年から200年は持つといわれています。本当は山原材が良いです。

饒波；始めはどうせ足りないのだから、斧削りで売れた訳です。沖縄の家屋のおよそ90%は戦争で焼けたんだから。どの木を持って売れた訳です。ところがしばらくすると奄美大島から製材した木が入ってきたんですよ。製材した木は見ても上等だし奄美大島の材と値段の差が出てきた訳です。この奄美大島の製材した製品に刺激をうけて、国頭でも製材をやったんですね。奄美大島で販売している人はほとんど国頭出身でした。喜屋武とか山入端とか比嘉材木店とか、山原で経験のある人がいたようです。これらに刺激を受けて山原の

人も製材をするようになったです。久高さんといって有名な久志出身の人がいて、ほとんどの北部の人がその方に材を売っていたと言います。しばらくすると、スギ材が入ってきました。当時沖縄で一番といわれた家が仲尾次のカテナです。30坪のスギ材の家が出来ていて、沖縄で一番上等といって見に行ったことがあります。

宮城（正）；奥ではね、戦災の復興を急がなければいけないということで、部落役員が簡易製材所を作ることを決め、昭和21年に簡易製材が設立されました。

仲間；部落で設立した訳ですか。

宮城（正）；はいそうです。

浦崎；個人ではですね、伊地の方にですよ、宇良の今の宮里実業の宮里茂さんのお父さんがですよ、製材所を建てていました。戦前のことで昭和14年頃まで伊地でやっていて、その後、那覇に引越した訳です。

饒波；あれは普通の製材じゃないですね。砂糖樽用のクレ板だけの製材で精米とかねてやっていました。

仲間；水車を使った製材という話がありますが。

大嶺；これは戦前の話ですよ。

宮城（正）；水車製材は奥ですよ。大正の初期頃とされています。那覇のなかや材木店が奥のしゅんぴんとうと言う場所で水車製材を始めました。私の記憶では大正2～3年頃から奥の製材は水車によって始まったんじゃないかと思います。4～5年してナカヤ製材事業が思わしくないもんですから、それを奥部落が買い受けたわけです。1,900円で買い受けて奥がやっていたということが記録にちゃんとあるんです。

仲間；奥の部落が1,900円で買い取った訳ですか。いつ頃ですか。

宮城（正）；奥の共同店がナカヤ製材から買い取ったです。

知花；僕が役場に入った1960年頃には、国頭村の人口は11,000人だったです。

大嶺；木炭、薪などいろいろでましたけれども、竹、藍、シイタケやタケノコなどの特産林産物について、どなたかお話ありませんか。

浦崎；竹はですね、中南部の農協や材木店などで取り扱っていました。茅葺小屋でも竹じゃないと出来ない。ヤンバル竹というのは木材と一緒に中南部の農協や材木店では、みんな取り扱っていました。いくらでも足りない訳です。シイタケですが、昔は旧の12月暮れになると、山に行って野生のものを取ってきました。木を切った切り株から2～3年すると野生のキノコが生えてくる訳ですね。これを取ってきて山の連中が食べたりしておったですがね。次は漆器材ですね。お椀を作る漆器材にはシチャマギ（エゴノキ）を使いました。鍬の柄の材も中南部ではいくらでも不足していました。私も建材屋やっているがですね、大ハンマーの柄は1つ小売りで600円する訳です。仮に山に立っている物をですよ、200円ぐらいで買って森林組合で機械工作して300円にし、それを500円で売るんだったら良いもうけになるんだがなあ、つくづく感じる訳です。今、農機具の柄は100%本土からきている訳です。こういうものが国頭の山から出て行くんだしたら、ものすごくお金になるんだがなあと感じています。

饒波；山原竹はね、国有林や県有林では取ってくれるのを歓迎していました。これは木が成長するのに竹が邪魔になるからです。昔は茅葺家を作るとき茅竹をユイ（結い）で取っていました。ところが最近取らなくなった。木が大きくなると竹類はほとんど枯れてしまう。ススキも更新しないと枯れます。早く切って子や孫出した方が緑は増えますよ。

玉城；サポート材、枕木などの産物もやっておく必要があります。

浦崎；大東島の枕木の需要で一箇所の製材で半年ぐらいの仕事がありました。

饒波；雨に強いのはシジャー（イタジイ）が一番ですから昔は外壁や横壁板に使っていました。イジュは雨に弱い。シジャーは雨に強く青塗りしたらいつまでも持つといわれています。

仲間；山原の山で食べられるキノコには、どのような種類がありますか。

浦崎；大体4つぐらいあります。チリババ、マチナバ、シイタケ、アサグルナバ、ミミグイなどです。

仲間；時期があるんですか。

浦崎；旧の12月から1月ですよ。

仲間；ミミグイは年中ですか。

浦崎；ミミグイは雨が降ったら年中ですよ。

仲間；アサグルナバはどの木に出るのですか。

饒波；やわらかい木でフカノキに出ます。こういう琉歌があります。マツナバヤマチョティ、チリナバヤチリティ、チヌクミミグイヤ、ゴムチサビラ。（松なばは待って、ちりなばは連れて、きのこ耳食いは皆の物にしよう）

大嶺；国頭の山のあっちこちに藍壺があります。どの時期までどれぐらい盛んにやっていたのか。どなたかお話をできませんか。

饒波；琉球王府の杣山時代には夫役で木を植えたり育てたりしていましたよね。明治のころには杣山は里から通うには大変だから、そこに住居を作らして住ました訳ですね。戦前の国有林や県有林の時代になると、山を払い下げしてそこにイモを作らして自給自足ができるように考えた訳です。明治のころ首里や那覇の侍に仕事をさせる為にヤンバルで藍作りをさせた訳です。山で開墾地があった所はほとんど藍壺があったということです。山だけでは飯が食えないから、その中でエーチブ（藍壺）を作ってやらんといかんということです。辺土名で子供の時に聞いた話では、佐手山に藍作りの仕事があって、若い男女が一緒になって寮みたいなものをつくってやっていたようです。部落内にも藍壺はありました。辺土名の今の北勝建設会社の辺りに2つありました。原木が足りないで木炭も部落の入り口で各所から原木を集めて焼いていました。うちの親父もやっていました。男より女が儲かるのは木炭の原木運びです。男は肩に担ぐのだが、女は背負うので量が男より多くなります。女はチューバー（強い）です。

仲間；国頭で藍はいつ頃まで作られていたんですか。

饒波；戦前の話です。

仲間；共同店が1番気になります。国頭の各集落に共同店がありますよね。林業とどうかかわってきたかね。各集落ご

とに話があると思います。

与儀；国頭は90%が山稼ぎですからね。共同店は手数料をいくら取りますよ。出荷料としてね。共同店に薪とか材木とかを入れてから、その代金で前借りしている分を差し引くという形です。生活共同体的な考えですよ。前借りも出来る訳ですよ。食料品やお酒などを薪や木材などの山代から引いてくれたんです。

平識；林産物が担保ですね。現金を借り入れしたり、食料品をエンバイ（掛売り）で買って、年2回の共同店の決算で清算する訳ですよ。

仲間；一番歴史の古い共同店は奥部落ですよ。奥部落の場合、どのようにしてやられていたのでしょうか。

宮城（正）；林産物は共同店が一手に販売する方式で、第三者が入ることができなかった訳です。まず材木、木炭、角材などは全部共同店に入れます。それを共同店が責任を持って那覇方面で販売します。那覇の販売店には1人責任者（青年会）を置いていました。この人が林産物を販売処理し、また生活用品などの必要な物資を調達し送ってくる訳です。共同店所有の船がこれらの物資を運んでいました。その当時船は3艘いました。当時奥部落には木炭業者の組合員数が60名、また林産物生産業者の組合員数が60名ほどいましたからね。あの当時は人口が多い割に耕地は少ないし、山に依存しなければ生活出来ない訳だから、ほとんどの若い男は山に関わっていました。

仲間；薪とか木材を共同店が現金で買い取る訳ですね。

宮城（正）；林産物を持っていったらその日で計算します。金も渡します。

浦崎；お金も渡しますよ。日当と一緒に日払いする訳です。特に林業やっている方々は子供たちも多いでしょう。借り入れと言うのも多いわけ。そういった方々には米などを買うと帳面にとめてあって、月締めでいくらまで掛けは認めるということで売店はやっていました。最終的には年間の決算で清算していました。どこの売店でも共同店自体が生活を全部引き受けていた訳です。

宮城（英）；国頭村で与那だけは特別だと思います。共同店と林業との関わりはあまりないですね。与那には林業関係の業者がいて、その業者との関係なんですよ。共同店を建てたのはその後です。当時の成人会がスギ材を共同作業で切って売り出して、その元手で共同店ができた訳です。与那では個人の店が先で共同店はその後なんですよ。与那の場合、林産物と共同店との関係では他の部落と違いますね。林産物関係の業者がいて、他部落からも業者が買い取りにきていました。与那だけでも3、4人ぐらい業者がいましたからね。

大嶺；山を盗まないと生活できなくなったですね。

渡具地；戦後のことなんですが、天然林の保育で県の補助が出たんですね。部落共同で造林をやってその補助金を部落の財源にしていました。太田政作時代からね。辺土名から共同店とのかかわりが、だんだんうすくなっていきましたね。サポート材、角材などを業者が取り扱うようになって、共同店は次第に林産物の取り扱いをやめていった。

平識；共同店はですね、相互扶助の組織ですよ。

大嶺；与那だけが共同店の形態が違うのでしょうか。他は同じですよ。

与儀；辺野喜は共同店でやっていましたね。製材所は3箇所ありました。

仲間；宮城さん、他部落の業者がきて買い取って行くというのは、どこの業者ですか。

宮城；部落の業者が主ですね。

仲間；与那部落の業者が買い取って、それを那覇とかに売るわけですか。

宮城（英）；そうです。

仲間；大学に就職したころ、玉城凱宜さんのお父さんにお会いして、炭焼きの話聞いたことがあります。あの子の話が今でも印象に残っています。木炭を焼くときは、1週間も2週間も山に入って木を切り、焼いて製品化して持つてくるという話でした。炭焼きで与那覇岳周辺まで行って焼いたという話はありませんか。

饒波；もともとは山奥で製炭するのが合理的なんですよ。木は運ぶには重いですし。道が遠ければ遠いほど難儀だから、できたら山奥でやって軽くして出す方がいいです。今でも辺野喜ダムとか奥山には木炭窯の跡が沢山あると思いますよ。

仲間；これは村有林内の話ですか。

饒波；いろいろありますね。

与儀；村有林ですね、一番盛んだったのは、村が山を払い下げて木炭を焼かせ、その木炭を村が買い上げ、その中から木炭1俵からいくら引こうね、ということで山の利用を与えた訳ですよ。山奥ではヤードウイ小屋（宿り小屋）を作って、そこで焼くわけですよ。饒波正一郎さんが言ったように運搬業務は女性が専用でした。炭俵の担ぐ量は女が3俵、男は天秤棒で4俵ぐらいでした。

饒波；木炭山では5～6日山にいても仕事がある訳ですよ。

タンゲー（木炭を入れる袋）を編む訳ですよ。力がなくてもできますよ。仕事がないということはないですよ。

玉城；タンゲーですね。多いときは何百と使います。タンゲー製作の専属の人々がいっぱいいる訳ですよ。村内はもちろん謝名城（大宜味村）まで使いました。タンゲーがないと木炭の生産はできません。

与儀；それはですね、木炭の買取業者が買い集めて木炭業者に渡す訳ですよ。

大嶺；僕は中学校までこれのアルバイトをしていましたよ。

饒波；在来種の馬で木炭を運ぶのもありました。人だけじゃなく馬でも運んだのです。

仲間；タンゲーとは何ですか。

饒波；木炭の入れ物です。ススキの長いもので作ります。蓋にシイジャーの木の葉っぱを詰めました。

仲間；奥山に何日間泊まって炭を焼いたというのは村有林内ですか。主に村の山を払い下げて。

与儀；主に村の庁舎を作る時に競売で村有林を払い下げた所ですね。木炭業者が土地まで買ってそこで木炭を焼くわけですよ。

饒波；それと山に住み着いている人がやって出す時もあります。住み着いた人が県から払い下げを受けて製炭するとい

う例もあります。

仲間；払い下げが多かったですか。

饒波；払い下げが多いですね。

仲間；それが与那覇岳の辺りまで広がっていたのですか。よく伐採されていたということは、その林相も以前より違った景観になっていたんでしょうね。

与儀；共同店と部落とが一緒になって払い下げして、炭を生産していました。当時、沖縄県の木炭のおよそ30%は奥炭ですよ。奥炭のマークを付けて昭和50年ぐらいまでやっていました。いい食堂は炭でご飯を炊きよった。

浦崎；木炭の話ですが、私は林業やっているもんですからね、人夫を遊ばしては困るということで大きな窯を持っている訳ですよ。だいたい4.30mから5.30m入る窯をもっています。人夫に木を切らして入れて生産し、製品にして販売するまでの1つの窯あたりの経費は、赤字ですよ。今の人夫賃の値段で計算すると、そうなりますよ。

饒波；経費がかかり過ぎるということですね。

玉城；これからは機械化しないとやっていけません。ミカンでも下草を刈りたら引き合わないですよ。除草剤をばつと撒けばいいですが。

大嶺；軍用木炭は何に使ったのですか。

与儀；軍は飯を炊く時に薪で炊くと煙が出るでしょう、だから煙のでない木炭で炊いていました。

大嶺；軍用木炭というのは、燃料にも使ったんですか。

饒波；昭和13年頃にバス協会が燃料として木炭ガスを使っていたことがあります。

大嶺；またそんな車にならんかね。（笑）

饒波；堺屋太一先生がそうなると言っていました。

大嶺；だっからよ～。

饒波；将来のために木を植えときなさいということですね。

大嶺；世界で石油はあと60年しか残ってないですよ。天然ガスは400年、石炭はどうか。木材は永久不滅な資源なのに。

饒波；木は何回でも利用できるから。

仲間；奥炭ではどういう樹種などを使って、どういう形で製炭していたか、お聞きしたいですね。

大嶺；正男さん、奥では木炭の樹種は限定されていましたか。樹種は何でもいいのかな。

饒波；原則として堅い木ほど良いです。

与儀；アサグル（フカノキ）は分けて使っていました。

宮城（正）；アサグルなんかは焼けないわけじゃないけど軽量でね。

大嶺；アサグルだけだったらいいですけども、温度差が出てくるから、どうしても時間差が出てくるからね。一緒に入れられない。

宮城（正）；製炭業者の名前でタンゲーの質のいいものがわかりました。

大嶺；詰めたタンゲーに生産者の名前を書いておくと、質の悪いのがわかります。

宮城（正）；生産者の名前を札付けてして送りよったから、悪いことはできなかった訳ですよ。

与儀；木札ですか。

仲間；木札に誰その名前を書くということですね。

与儀；たとえば北山と書いて生産者名を皆んな書く。玉城凱宜さんの物は木を四角に切りそれに丸玉と書くんです。

玉城；生産者の名前がつく訳です。

仲間；奥で皆んなそうやっていたんですか。

与儀；奥でもまちがいがなくやっていた。

大嶺；生産者が60名もいたらやらんといけなんでしょうね。

与儀；うち年間約15,000俵ぐらい運搬しよったからね。

仲間；これって今農産物でやっている生産者表示みたいなものですね。

渡具地；軍用の場合には検査官が配置されて、目方を計ったり内容を調べたりしていました。

玉城；与儀さんなんかは、天に付くぐらいまで満載してましたよ。

与儀；国頭にトンネルがありますよね。あれに付くのが限界で、あれで高さ計りよったです。

仲間；炭俵に名前を入れる理由は何ですか。

大嶺；消費地の仲買に渡った場合に、あんたの物は質が悪いとか何とか言われると、向こうが困るでしょう、向こうだけじゃなくて、今度は地元に戻ってトラブルの元になるから、名前を書いとけばはっきりする訳だから、そういうのを防ぐ為です。

饒波；たたいて音が高い方が炭はいい訳です。

大嶺；質がよくなってくるわけですね。名札を下げればウソをつけないわけだから。木炭の風鈴など、いろんなものが有りますね。

仲間；炭琴といって楽器もありますよ。

大嶺；これまでの話でダブっているものもありますが、伐採の仕方、運材の方法、特に伐採の仕方は終戦直後あるいは戦前どうであったのか、復帰後も重機を入れて伐採していたか、それがどの時点からどういうふうに変ったか、そこらあたりから触れていきたい、と思います

与儀；木の運搬は人の担ぎから馬とかありました。終戦直後はですね車で運ぶ時代もあった。それからアメリカの払い下げのブルドーザーで搬出することもあった。次に集材機ですね。森林組合が安波ダムの伐採から導入しました。簡易道路を作って米軍のベーカーとか米軍の車両を使った搬出があった。ウンボでの集材もありました。今では集材架線を利用するようになりましたね。その後は林道の整備でトラックによる搬出になりました。

仲間；戦前は主に人の担ぎや牛馬で搬出してたんですか。

与儀；そうです。終戦直後でも里山では馬で引いてきて製材したんです。個人が山を払い下げする場合は、自分で設計して作った林道などを使って搬出するものもありました。米軍の車両を使って運搬することもありましたね。安波ダムとか公共団体の大きな規模の伐木集材においては集材機を使っていました。集材機を利用するのは赤土汚染の防止をするというねらいもありました。

饒波；木を切る時ね、必ず注意を受けるのが、いかにして安全に切るかですよ。木をきる場合、周囲のカンダ（ツル）を必ず切ってから木を倒します。カンダが絡まっていると木

が飛んでくるのです。これを木ハブとっています。伐採木は山の上から下に降ろして運びます。これが鉄則ですね。そのため林道は主に川に沿って下にある訳です。横断線にある大きな蔡温松を切るときに、蔵吉屋のおじいちゃんはちゃんと道に寝かすように倒していました。切る人の技術というのは大変だなと思いました。昔は大木はなかなか切れなかったです。明治以降、大きなノコが普及するようになって、大木も倒すようになりました。

与儀；今はなんと言いましてもチェンソーですね。森林組合ではチェンソーによる伐倒は安全管理を徹底して行っています。

饒波；木の上にいるハブは攻撃がものすごく速いので注意しなければなりません。夏はよくハブが木の上にいるので注意が必要です。

与儀；チェンソーがまだない時代、山に行くときはナタとノコを2本持つことが原則でした。木を切るときに木にノコが食い込んで取れないことがよくあります。そのための対応策ですね。

大嶺；ノコからチェンソーに変わったのはいつ頃ですか。

与儀；森林組合設立前からあったと思います。

浦崎；チェンソーは森林組合設立前からあるんですよ。今から30年前の林業組合の時代以前にもありました。持っていたが、チェンソーが普及しはじめたのは森林組合がパルプ材を出すようになってからです。浜にパルプ工場がありました。あの当時からチェンソーは使われ始めていますよ。

知花；昭和35年～36年頃ですよ使い始めは。

宮城（英）；我喜屋造林が早いですよ。

浦崎；我喜屋造林が来ない前にうちは2台置いていました。

与儀；宮城勇さんが助役のときに補助事業で入れましたよね。チェンソー50台。

浦崎；アメリカのブルドーザーが入ってくる前は、与儀さんもいったように、主に人肩と馬で運んでいましたね。

大嶺；知花さん、田嘉里のチップ工場というのは昭和40年に入ってからですか。

浦崎；その前に内地にチップが出たわけでしょう。

大嶺；そうそう。

知花；丸太を昭和35年から昭和36年頃。

浦崎；本土の方に運天港からチップを運搬していました。

大嶺；こっちでも昭和35、6年ごろから使われています。

渡具地；運天港からは何も運んでいない。八重山からです。

大嶺；こちらから福岡の方に原木が多く運ばれたのは、田嘉里のチップ工場がつぶれてからではないでしょうか。

与儀；一番初めはさ、運天港にもって行きよった訳ですよ。八重山開発が集めていました。その後にチップ工場ができ、原木はチップ工場に行くようになりました。宇嘉に沖縄造林の造林地があるでしょう、あれがパルプを買い上げていた訳です。

平識；あれは復帰前では。

大嶺；復帰前です。

仲間；戦前・戦後の山の切り方についてお話をください。

宮城（勇）；択伐です。

大嶺；戦後まで択伐でしょうね。

大嶺；復帰後は皆伐でしょう。

与儀；復帰後制度が充実してから皆伐です。

大嶺；それまではほとんど択伐でしょう。

饒波；戦前でも木炭山は皆伐です。

仲間；木炭は皆伐ですね。

饒波；皆伐です。

与儀；皆伐したところはそのままだと萌芽して25年ぐらいで林になり伐採できます。

饒波；黒糖樽用のクレ板の原木ですが、3尺の長さに切って川岸に蓄えておいて大水が出たら川で流すわけですよ。海岸まで。とくに松の場合はあまり長く切らないで1尺5寸ぐらいですかね。タルグァ（樽小）は3尺に切って大水が出ると川に流し浜で待つ訳ですね。この川の水流を利用する運搬は多かったですね。まとまった物では船1艘分出していました。

仲間；抜き切りや択伐によって萌芽林ができ、それをまた利用していたのですね。

大嶺；そのころまでは造林もないし、良い木だけをとらんことには金にならなかったでしょう。復帰後チップ材が出るようになって、山を根本的に作り変えて行こうという考えができてきた訳です。

仲間；復帰後ですね。皆伐して拡大造林を進めていったのは。

大嶺；はいそうです。

大嶺；スウカンというのは何ですか。

仲間；スウカンというのは木材を1年から2年海中の砂地に埋めてから利用する方法です。その目的は主に防虫ですね。潮につけるのでスウカンと言っています。渡名喜島や八重山あたりでそう呼んでいます。地域によっていろいろ呼び方があると思うのですが、こちらでは何と言っているのですか。

大嶺；こっちはスチカーといいます。木材を海、海岸の近くの川べり、河口、田んぼ、などの砂地や土壌につけています。

仲間；そういうのが国頭でもあったかどうか。

大嶺；こっちにもありましたよ。

与儀；埋めてアクを抜かしてから建築材として使うんです。

仲間；目的は主に防虫ですよ。

大嶺；それもありますね。以前は今みたいに機械力はない訳ですから、お父さんが1人で自分の家を建てるのに材を切ってやる訳ですよ。山に行って1本1本吟味して伐採して来る訳ですね。伐採した木を担いで帰ってきて、これをそのまま日向に置いておくと2、3年で腐れてしまう訳です。それで水につけて置くと材は強くなると同時に、後でわかったのが水に浸けたら防虫防蟻にもいいという話ですよ。スチカーも木材を河口付近に浸けたり水に浸けたりする保管方法の1つであったようです。

饒波；とくに戦前からあることはカシですね。荷馬車を作る材は海の波打ち際につけてから販売していました。そうじゃないと割れて中に穴があくんですよ。カシの場合は波打ち際につけていました。

浦崎；フクギとかマツの場合にはひび割れをするものです

から、変形防止にウジュン（水中貯木）するといわれていました。

平識；変形防止ですね。

饒波；変形防止と虫予防ですね。シール（汁）を含んでいる物に好んで虫はつきますから。虫がつかなくなる訳です。

平識；特にカシなんかは特殊材ですからね。カシなんかはやりましたよ。

仲間；カシはそうしないと虫が付いたり割れたりするんですか。

平識；変形させないためにね。

饒波；亀裂が出るんですよ中に。浸けおくと青黒い汁が全部出ちゃうんです。

大嶺；長期間の木材の保管方法ですよ。そのまま置いとくと腐れて朽ちてしまいます。昔は自分の家を建てるのに5、6年から7、8年もかかった訳ですね。今だったらもう材をばつと買ってきて家を建てるのですが、昔はある程度木材が揃った段階で作っていました。

饒波；大きなカシ木を切る時には2人引くノコがあるんですよ。2人引きでやるノコで上と下で2人で引くわけです。こうして山で角材にして運ぶのです。

与儀；終戦直後、ゆとりのある人は自分の山からイジュとかいろんな建築材になる木を伐採して利用していました。その材は防虫処理していました。一番の欠点はクギが腐れることです。今のように良い釘がないでしょう。それで釘を打ったら必ず腐れる訳です。

大嶺；70年から80年前の家になると本当に貫屋大工で作られていますね。あれはまた全部は見事に外せない。というのはタヒニーの家を壊した時に、春男兄さんがどこからはずしていいのかわからなかったです。1時間半ぐらい物思いにふけていました。そこで前田のおやじが重機もってきて叩き壊せとっていました。せつかくここまで外しているのに、次にどこからはずしていいのかわからない訳よ。あの家は94年目に壊したけれども、今、浜に残っているのはアガリの家で100年越していますね。

饒波；兼久の親父のものも解けなかった。

与儀；造林については、適地適木という林業指針がありますよね。戦後は造林指針に従って造林するようになりました。戦前から終戦直後までは萌芽林から始まった訳ですよ。皆伐して木炭を焼き萌芽林として利用していたわけです。

仲間；山焼いて一時的に畑に使っていて、後に松の種を蒔いて造林するやり方はありましたか。

与儀；畑にはやってないですよ。直接造林目的でやっています。

大嶺；畑にはやってないですよ。

仲間；火入れ造林は戦後あったのですか。

大嶺；復帰後までありましたよ。火入れして山を焼き松の種をまくのですが、火入れで延焼させて翌日さんざん経済課長に怒られたことがあります。

与儀；松は焼いた方が発芽率が高いということです。ちょっと穴を掘ってから種子を植えるといいです。ばらまいてやっではいけないですよ。植えるところはちょっとクワで穴を

掘って種を入れると、一番間違いないですよ。

大嶺：焼畑造林は焼畑松林ですね。

浦崎：今の松造林の話ですが、1963年に伊地部落で辺土名山に松造林しました。伊地部落で今残っている松山も部落で植えたものです。松造林をする場合は、まず伐採して焼き払い松の種子を蒔く方法でやりました。うちは当時部落の会計をしていましたが、山を焼いて松を造林するということにびっくりしました。村も山を焼くのにOKでした。その代わりに鋤で掘って種子を3つづつ入れなさいと指導していました。しかし、発芽率からするとバラ蒔いた所の方が不思議と発芽はよかったです。1963年頃の話です。そのときの山係りが金城次郎さん、村の担当が国吉しんこうさんでした。海岸近くに焼畑がありました。昔はあきけ一畑（明替畑）といって、3年間畑作でイモを作り、あとは松の種子を蒔いて松林にしました。

饒波：昭和14年に楚州と伊江の部落の間に私が松造林したんですよ。その時の県の指導は焼いて灰がぬくうちにまきなさい、そして植物が芽を出す時はカリ分を一番必要とするから発芽も良くなりますよ、と言って蒔かしたんです。考えてみると、これを怠っているから松喰い虫が入ったと私は思う訳です。必ずそこにある木の下に翌年も松喰い虫はでます。焼くと有益な虫が死ぬとかなんとか言っ、何の経験もなく頭だけで考えて造林するから松喰い虫にやられる訳です。ぜひ先生このことを何かに書いてください。(笑) これは冗談だけど。

仲間：先ほどの話ですけれども山を焼いて3年間イモ畑に利用して、後に松の種子をまいて造林するというやり方、これ王朝時代からありますね。文献資料には「喰実畑」、「明替畑」などと書かれています。

大嶺：山を作る目的じゃなくて、自然に生えてくるという話ですか。

仲間：3年間芋などを作り、その後、雑草が繁茂してくると焼き払い、松の種子を播き入れて更新する方法ですね。そういう土地利用の仕方というのは、戦前戦後にかけて国頭では一般的にやられていたのですか。

饒波：国頭村の奥と辺戸の間は全部焼いて種子を蒔いた所です。苗木を植えるやり方ではなく、みんな種子撒布で植林していました。

大嶺：宜名真山は僕等が役場に入ってから昭和49年から昭和50年ごろに植えたところですよ。宜名真の上と宜名真の後ろのところに火を入れたが延焼して、消火活動した覚えがあります。畑をほったらかしておくと先に生えてくるのが松です。要するに山の土地にブル入れて地肌を剥ぐと真っ先にススキとか草が生えてくるんですけども、その後生えてくるのはまちががなく松です。

饒波：松の種は羽がはえているから、海岸や嶺に生えている松から種が飛んで来る訳です。

与儀：前までは松の母樹がたくさんあった訳ですよ。今はもう松喰い虫で母樹が少なくなりました。非常に怖いんですね。だから他の木がぼんぼん生えて来る訳ですね。

大嶺：ここで戦前戦後の国頭村における製材所の移り変わ

りについて報告します。平成6年から7年にかけて、各区の人々から聞き取り、一部は各字誌で補足しました。製材所を経営していた実態について、部落、所有者名、操業年の順に敬称略で報告します。

浜：宮城調美（昭和23年～昭和36年まで）。大嶺秀夫（昭和36年～現在）。

半地：水車製材所（昭和26年、約1年間）。米軍の命により現在の公民館近くに建てられた。

奥間：山川新裕（1946年～47年、1年間操業）。親川太郎（1947年～1979年まで）。枝川徳太郎（1952年～1957年まで）。

辺土名：新里親太郎（1952年～1956年）。饒波正一郎（1952年～1972年）。知花新光（1947年～1966年）。国頭村農協（1945年10月～不明）。照屋唯徳（1961年～1965年間）。

宇良：玉城繁信（戦前～戦後）。

伊地：上里良栄（1950年～1960年）。浦崎家正（1965年～現在）。

与那：上間久雄（1948年～1950年）。上間久賢（1950年～1952年）。金城五郎（1951年～1953年）。この後、金城五郎の機械は平良玉秀に渡って辺戸、安田と移動。平良玉秀（1953年～1955年）。米軍払い下げ車両の前輪を外し製材機械のプーリーを回していた。燃費がものすごく高かった。

佐手：小橋川春助（1951年～1961年）。ここから特に宜名真ダムの杭材が出されていた。当初は山で斧で荒削りした後、3～4年後、荷車で搬出した。従業員4名。薪、山原竹、サポート材、キチ材などを搬出。角材は1本14～15円。那覇、豊見城、具志川、与那原、コザ、安慶名、名護などへ出荷した。

辺野喜：1956年（昭和31）島袋松三郎が技術者を源河から呼び寄せ製材所を建設。後、機械は弟の松次へ譲る。

1960年（昭和35）に区営となり1965年（昭和40）に廃止。1950年、区に林産部、1951年に自動車部ができる。自動車部は1967年（昭和42）7月常会で売却決定。8月5日、代議員会で売却価格が1,200ドルと決定。同年8月6日入札価格1,700ドルで東江彦次郎が落札。

* 沖縄県は1931年（昭和6）8月、辺野喜港に林産物を一時貯蔵するため、水中貯木場（111.5㎡）、陸上貯木場（198㎡）、木炭仮貯蔵場（26.4㎡）を設置。

* 県は1931年11月、国の「山林失業救済低利資金」（23,000円）を借り入れ、県第1号辺野喜林道（車馬道、幅員12m、長さ4.42m）を完成。

* 1934年（昭和9）9月20日、県有林辺野喜製材所完成。製材工場はトタン平屋105坪、木材乾燥室が37.6㎡。

* 1934年11月、砂糖樽板製材専用機械増設。

* 1934年（昭和9）県有林の産物運搬用に、県は白土式木炭ガス発生機を備えたフォード四気筒専用

トラック（1.5t積）を3,550円で購入。各県有林より那覇倉庫や地元搬出港への運搬を担う。樟脳・樟脳油→鹿児島地方専売局、木炭→県内業者、枕木→沖縄県鉄道管理局、樽板→県業者、エゴノキ→工業指導所。

- * 1935年10月、県有林辺野喜製材所に発動機増設。ヤンマー15馬力。製材所の総事業費11,141円（昭和8～11年）、職員9名。
- * 1936年（昭和11）辺野喜林道を2,250m延長。総延長6,662mとなる。

辺戸：崎浜秀喜。宜名真ダムの杭材生産やクスノキの精油作り。平良玉秀（1959～1961年）。後に辺戸から機械も本人も安田に移動。

奥：1917～1918年（大正6、7）頃、鹿児島出身の仲屋材木店が製材所を持っていた。1916年（大正5）区民が林道改築と水力製材所を作る。1948～1952年（昭和23～27）頃まで、玉城章一、金城久栄、平安基一の3名で製材所を運営。

楚州：1954～1955年（昭和29～30）、名護の当山製材所があった。

安田：製材所。村吉政正（1949～1951年）。上原力造（1954～1957年、奥出身）。平良玉秀（1961～1965年6月）。安田共同店（1965～1971年）。

安波：比嘉竜太郎（昭和26～30年）が水車製材。1955～1958年頃、名護の我那覇さんが安田地内の普久川周辺で製材所を建てる。

以上、戦前戦後にかけて国頭村内にはかなりの製材工場があった。

仲間：製材所の数ですか。

大嶺：戦前戦後にかけてだぶった形ですが、約19工場ありました。

大嶺：その他に、山稼ぎの話などがありましたらひとつお願いします。

宮城（勇）：これまで新里善福さん、山川武雄さん、饒波正一郎さん、三代の村長に使えて来ましたけれども、特に産業関係で山との関係が多かったですね。ご承知のとおり国頭村は農地が少ないので、若い連中に農地を作って上げようということで農地開発事業を村有林を利用して、17、18部落でやりました。楚州と安田の方に畜産基地をつくりましたが、それも何かしら初期の目的が十分達成されたとはいえないじゃないかな、と今になって考えています。いろいろ事情があると思います。それと同時に村民が借地をして村有林を農業なりあるいは造林などに利用していましたね。確か饒波正一郎さんの時代だったと思うんですけども、昭和38年頃、庁舎建築資金作りのために個人に安い値段で村有林を売却して財源を増やしていききましたね。これは確かに今でも有効に使われていると私自身思っています。村有林を譲渡した土地をですね、「入会林野等に係る権利関係の近代化の助長に関する法律」（昭和41年7月）ができて、それをうまく利用しましてね、この事業で測量、登記まで全部済ませました。

饒波；何を話していいのかわからなくなりました。もし聞きたいことがあれば答えます。

渡具地；宮城さんから畜産基地の話が出ていますが、私も当時議員をしていて、今の立場から言うとう頭痛いです。奥の畜産基地も何億か掛っています。収入面からみて果たしてやってよかったのか悪かったのか迷うところです。公有林を払い下げた農地開発にしても、半分以上は遊休化しているし、われわれは立場上頭の痛い話です。

饒波；山業は難儀苦勞ばかりで人がやるもんじゃないというので、パイン栽培しようということになった訳です。僕が副議長していたときに庁舎建築基金というのが山川村長から出ました。庁舎の建設にいくらかかるかというところ28,000ドルという。村有地の小作料が年間1,000ドルでしたので、28年後にこの庁舎は作るんですか、と聞いたから苦笑いしていました。小作地よりも自分の土地にすると農業にも熱が入るし、そこで山川村長に小作地を売りましょうと言いました。1,000町歩はあったんですよ。当時、私が委員長だったので、各字廻って、土地の向き、勾配、距離などを考えて5段階に仕分けしました。

平識；今、宮城勇さんと饒波正一郎さんがおっしゃったことは、村庁舎建設資金造成のためにですね、千町歩も払い下げたので、その後、国頭村の農業振興の起爆剤になったですよ。

渡具地；後から県が指定して農地開発事業したのが遊休化しているので僕は頭にきています。国、県、村もすぐお金をかけています。あの当時、払い下げた山はほとんどそのまま残っています。

与儀；渡具地さんは監査員の立場から非常に義務を感じられていますが、政治の立場からすると特別措置法がある間にこれだけの基盤を整備し、農業法人を編成して大規模農業を推進していくことを考えたわけですね。公共工事が無くなればどうしても農業に依存する比率が高くなる訳です。今、宇嘉でもどこでも法人組織で大々的なキビの作付けが始まっています。これは絶対に特別措置法や水源基金がある間に、財政が捻出できる時に投資しておけば、後に誰かが活用していくのです。そういうことで私は非常にいい財産を残してくれたと思っています。我々の子供も300坪の農地にキビを夏植えしましたよ。そのような時代が来たわけですよ。そこで行政がソフト面でどう対応するか。どのように助成して農家を育成してあげるか、その政策が問われているんじゃないですか。

宮城（勇）；これからの問題として、個人と言うよりは農業法人を作らして、若い連中に土地をまとめて遊休地を区画整備してやるということですね。

饒波；狭い沖縄で沢山の人が住むには、ある土地を有効に利用しないと住めませんよ。

与儀；一番大切なものはなんといっても林業振興ですよ。これからどのようにやって行くかですよ。若い者の雇用もあります。造林事業するにも90%は人件費ですよ。公共投資しても中南部から来る請負業者の下請けですから働く人はいないですよ。地元の人はいない。しかし林業組合というのは、これだけ地元の若い者が従事しているので、90%お金

は地元に着きますね。地球規模のCO₂の問題や水源の機能を高めるなど、森林を多面的に使える環境にあります。このことを我々森林組合員は忘れてはいけないと思います。また行政も村民もこのことを進めないと国頭村の発展はないと思います。国頭村の林業をいかに振興していくか、このことが今後村の発展に大きな影響を与えると、私は思っています。

饒波；大正時代でも国頭村の農地は1,000町歩、今も1,000町歩、何でそうなのかなと考えると、アキゲ畑が農地に入っているから1,000町歩になっている訳です。ソテツの話ですが、「ソテツ地獄」という言葉自体間違いである訳。ソテツ世果報の世ある訳。ソテツを食べなければ死んでしまうのだから、自分で毒がないように水で流してやるのは当たり前であって、「ソテツ地獄」という言葉自体が間違いです。あれだけ茎も実も葉も利用できる植物はない。しかも植えて大きくして置けば永久貯蔵庫である訳。なにも倉庫も必要ない。しかも運ぶときは高い山から下に落とすから人件費もかからない。今の日本の科学でデンプンに出来ないはずがない。怠けている証拠であります。国頭村のアキゲ畑を使って、森林組合が植えてやればいい。

渡具地；僕は安田の近くを通過して海に行きます。見るとね、西海岸のソテツは土に被われて全滅状態にあります。宇嘉も座津武も壊滅状態です。辺戸岬当たりの開墾地も灌木だけです。50年後にはソテツは全滅です。

大嶺；ソテツ世果報の話が出たついでに、山稼ぎの話について浦崎家正さんお願いします。

浦崎；山稼ぎの話ですね。私が製材が一番魅力があったのは、与那トンネルの工事で矢板を1万ドル契約したことです。製材業していてこれまでに最高の儲けでありました。山原材も使い方によってはいい物がでるなと思いました。今スギ材がm³当たり30,000円、2級品が32,000円で来ます。復帰後、矢板の場合はm³当たりで42,000円でした。復帰後、導水トンネルが久志まで行くようになりました。本土の商社ゼネコンが入ってきて、浦崎さん契約しませんかと来たんです。あの当時は商売は微々たるものでした。本土の商社の契約の半分は手形ですよ。この商売で手形の意味がわからなかったですよ。この商売において200万円出した場合は100万円は手形でやるんです。うちら銀行からお金を借りてまでは出来ないじゃないかと考えていた訳ですよ。あの当時矢板を割っていたのは、大嶺製材所と私、名護市の松田木工所、羽地の當山製材所の4社でした。4社が製材してもトンネルの矢板が間に合わない。10分の1も間に合わない。あれから本土のゼネコンの連中は内地から取り寄せたわけです。矢板の資材を。これで今の松くい虫の問題が生じた訳です。お互い山原材の立場がなかったもんだから本土の赤松時代がきたわけです。あの当時の矢板がm³当たり42,000円でした。今では金額からいうと話にならないわけです。あの時代は儲けましたということ。

与儀；一番困ったことは、戦災であわれして子供を育てる時期に仕事がなかったことです。そういう時代の初期から、山稼ぎして子供を学校に行かせました。こうして人材作りをしながら生活を支えました。山がなければ国頭村は人材も教

育もできなかった。そういう非常に大切な山を将来に向けての財産として守っていくことが、我々森林組合の大きな目的でもあります。そういう理念に立って森林組合の今後の運営と活動を期待したい。

大嶺；さっきもあったんですけども、ガソリンや石炭などの地下資源はいずれはなくなります。ところが木材資源は永久に不滅ですから、成長に30年40年かかるんですけども、切ってそのままではなく植付けしていく訳です。永久に作れる訳ですから、そういうたぐいのものをうまく生かしていく、山も含め森林組合の組織をどういう方向でやっていくか、今後、森林業をどのように位置付けしていくか、そのようなことを考えながら、やっていきたいと思っています。

与儀；今朝の新聞とテレビでガン治療に森林浴が大きな効果のあることが発表されていました。将来、森林浴をふくむ森林の多目的な利用を地域の活性化とどうつなげていくか。森林は水資源の確保にとっても重要な役割を果たしています。これらのことについて県民の意識を高め、水源涵養林地域に対する県や国の助成策を要求していく時代になってきています。山村としての取り組みが今後の大きな課題ではないか、と感じています。

宮城(勇)；仲間先生、今日大変お忙しい中、ありがとうございました。今日、ここで昔からのいろんな話がでておりますので、それらを分析していただいて、今後、国頭村や森林組合の歩むべき道をご指導していただくように特にお願い致します。

大嶺；最後に昔の山と比べて、今日の山が実際どうなっているか、一言ずつ触れてもらいたい。山がふくれあがっていることはお互いにわかっています。僕もあっちこちでしゃべっていますが、記念誌の中で活字として皆さんの意見を残しておきたい。

饒波；与那原のタムン(燃料用草木)を見て国頭ヤンバルの広さを知る琉歌があります。今のプロパンの変わりに昔はマキ(薪)を使っていました。タムン、サバチャー(割薪)、木炭などもありました。当時は国頭の山自体には木が少なくなって、ずっと奥まで行かないとなかったです。当初は割ってサバチャーを使っていたが、割るのがないので小丸太のまま出していました。今、山に入っても林道じたいが緑のトンネルになっています。昔はそんなこと考えられなかった。割る木がなくてカサグァー(小さい木)を女性が背負って持ってきていました。

平敷；山の林相の話ですが、30年前まで国頭の山には8尺、10尺、12尺のサポート材になるものはなかったですよ。3キロ、4キロ先に行ってもですね。今の私のパイン畑の側の国有林ですが、イジュが直径5寸、高さが20尺もあります。20年、30年前よりスギ林みたいに山が密林になっています。

与儀；特に2号線の法面には大きな木が生えています。公共道路の法面でさえ昔と違って木がおい茂っています。都市地区オンリーの物の考え方では、国頭村の森林は管理できませんよ。我々は将来に向けて現代の森林林業のあり方について研究して、うまく都市地区の人々のニーズに答えてあげることが求められています。

仲間；今日皆さんのいろんな体験とか、山にたいする思いを聞いて、私自身非常に心強く感じました。一昨日、県の林業講習会で森林ツーリズムの話をしました。そこで森林ツーリズムは単なるエコツーリズムとかグリーンツーリズムとは違うという点について解説したんです。森林ツーリズムを推進するためには、まず初めに昔の人々の山との関わりを文化や歴史の面からきちんと掘り起こして、それらを踏まえてそこから発想しないと絵に書いたモチにしかないよ、という事を強調しました。沖縄の林業は本土にない独特な歴史を歩んできました。特に山を風水的に取り扱う蔡温の森林管理技術などは、近世期の日本にはない琉球独特のすばらしい森林思想です。杣山という言葉も日本の律令制国家社会にまでさかのぼる古い言葉です。沖縄の森林林業は日本の制度と中国の森林思想とが混合したユニークなものです。沖縄は地理的に熱帯と温帯とが混ざり合う地域であると同時に、世界でも有数のサンゴ礁に囲まれた島嶼地域です。森林も熱帯と温帯のものがブレンドして、さらに島嶼環境下であって、国内でも独特な森林景観を創り出しています。沖縄県の森林については、技術的にもまだまだ未開発の部分が多いです。それだけ開発の可能性を秘めているということです。これは考えようによっては、われわれの足下に森の宝がいっぱい埋まっているということです。それを発掘できるかどうかは、われわれの知恵にかかっています。その森の宝を掘り出すために、先人達の知恵に学ぶことはとても大事なことだ、と思います。

大嶺；朝10時から長時間にわたって、ご協力ありがとうございました。これをもちまして座談会を閉じたいと思います。大変ありがとうございました。(拍手)